完本

白いページ

開高健

完本 白いページ

開高 健

潮出版社

完本 白いページ

©一九七八
検印廃止

昭和五十三年 六月 五日 印刷
昭和五十三年 六月二十五日 発行

著者 開高 健

発行者 富岡勇吉

発行所 株式会社 潮出版社

東京都千代田区飯田橋三―一―三
電話 東京(03)230〇七四一(販売部)
230〇七八一(編集部)
振替 東京五―六一〇九〇
郵便番号一〇二

本文印刷 図書印刷株式会社
付物印刷 栗田印刷株式会社
製本 株式会社鈴木製本所

(乱丁・落丁本は送料弊社負担でお取り替えいたします)

完本　白いページ・目次

白いページ

飲む 9
食べる 16
続・食べる 23
困る 30
聞く 37
驚く 45
狂う 52
解放する 59
救う 66
拍手する 73
抜く 80
見る 88
続・見る 95
すわる 102
弔む 109
流れる 116
続・流れる 123
学ぶ 130

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

遊ぶ 137
書く 144
余技る 151
遠望する 158
解禁する 165
無駄をする 172
読む 179
続・読む 186
試めす 193
続・試めす 200
続々・試めす 207
伝授される 214
枯渇する 220
火をつける 227
思いだす 234
続・思いだす 241
勵む 248
釣る 255
罵る 262
探究する 268

遂げる 275
入院する 373
判定する 287
退院する 379
もどる 294
翳る 385
申上げる 301
期待しない 392
証言する 308
考証する 399
着る 340
終る 406
投げる 346
かよう 353
直視する 360
消える 367

白い白いページ
海の果実と風博士 415
赤ン坊の刺身はいかが？…… 422
影を剝がすと家がこわれる 429
南に愕きがある 436
海は牧場か砂漠か 443
矩形の療養地 450
蟹もて語れ 456
海辺の幼児虐殺 463
ドジョウの泡 469
あとがき 476

装幀

熊谷博人

白いページ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

飲む

スタインベックの掌小説の一つに『朝食』というのがある。いきずりの旅行者が野宿している貧しい綿つみ労働者の一家に朝飯を御馳走してもらって、それがすんだあとまた旅をつづけるという物語で、文庫本にして五ページあるかないかというだけのものである。〝小説〟とも〝物語〟ともいえないし、〝ルポ〟というものでもない。もし記述ということばを使うなら作者がほんとに書きたくて書いたことがすみずみまでわかる、句読点の一つ一つにまで爽やかな息づかいのこもっていることがよくわかる、ある一瞬についての記述である。野外のひきしまった早朝の空気のなかでジュウジュウとはぜるベーコンの音がそのまま聞こえてきそうなのである。ただそれだけのことなのである。けれど、こういう絶品を読むと、文学はこれでいいのだと思わせられてしまう。

スタインベックではなかったかもしれないが、掌編で忘れられないものに、もう一つある。いま読みかえしていないのできっとおぼえちがいがあると思うが、私の記憶のなかではこうである。おそらく、ある夕方、一人の若者が放浪にくたびれて故郷の小さな町に帰ってきて、ある家の庭のよこを通りかかる。すると、一人の老人がホースで水を芝生にまいている。若者が垣にもたれて水滴がほとばしるありさまに見とれていると、老人がよってきて、ホースの口をさしむけ、一杯いかがといって若者に飲ませてやる。若者が飲みおわって手で口をふいていると、老人は

「何といっても故郷の水がいちばんだよ」

といって去る。

これもただそれだけの記述にすぎないのだが、『朝食』とおなじほどあざやかに記憶にのこっている。若者がどういう放浪をしたか。どんな国でどんな経験をしたか。いまその結果としてどのようにくたびれ、体のなかには何があるのか。そういうことは何一つとして説明してなかったと思うし、老人のこともほとんど説明はなかったと思うが、そのときの滴のほとばしりかたや水の味が白いページからひ

りひりつたわってくるようであった。かけがえのない感触が私の記憶にのこされている。

これも『朝食』とおなじほどの絶品で、金色に輝く脂の泡のなかではじけるベーコンを早朝の野外で食べてみたいと思いつめたみたいに、ある夕方、知らない人の家の垣にもたれて、くたびれた心身を荷物のようによこにおいてからゴクゴクとホースの口から水を飲んでみたいものだと思わせられたことだった。「一言半句をわれにあたえたまえ」と叫んで木から体を投げた聖者があったと伝説はつたえているのだが、この二編のような文章のうちの一行でも紙に書きとめられたらと、よく夜ふけに思いかえさせられる。

知らない国に到着して宿の部屋に入ってから第一番に私のすることは水を飲むことだった。その水がうまいと、何かいいことがあるような気がしてシャツでも着かえて町へ散歩にでようかという気が起るが、まずいと何をする気にもなれず、そのままベッドにひっくりかえってしまいたくなる。水道の水がそのままうまく飲める国もあれば、湯ざましでなければダメな国もあり、その湯ざましに消毒薬の匂いのする国もあり、ミネラル・ウォーターを註文しないとやりきれない国もある。洗面所でひねった水道の水がそのままうまく飲める国というのはめったになくて、フランスでもドイツでも、それは飲んで毒だというわけではないけれど、何ともザラザラと舌にヤスリをかけられるようだし、飲んだあとに荒涼としたものがのこされる。この水でためしに紅茶をいれてから、さめたのを見ると、表面にまるで膜のように何かギラギラしたものが浮いているのを見ることがあり、鉄分なのだ、とか、石灰なのだ、と聞かされる。マズいけれど毒じゃないからお飲みなさいとも聞かされるが、茶碗に指をのばしかけてもついとまってしまう。

中国大陸や東南アジア一帯も水がわるい。このあたりで生水を飲むのはほとんど自殺行為だと考えられている。たいていは一度沸かしてからさました水、つまり〝湯ざまし〟を飲む習慣であり、そうでなければ暑いなかで汗をたらたら流しながら熱いお茶をすする習慣である。湯ざましへさらに氷を入れたり、または瓶につめて冷蔵庫で冷やしたりしたのを中国

語で〝リャン・カイ・シュイ（涼開水）〟と呼ぶとか、お茶の冷たいのをヴェトナム語では〝ニョク・チャー・ダ〟と呼び、タイ語で〝ナム・チャー・ジェン〟と呼ぶなどとおぼえるのは、あのあたりを旅するについての必須の知識である。

このような地帯でことに田舎を歩きまわるには熱かろうが、冷たかろうが、とにかくお茶を飲むのがいちばんである。甘いお茶、辛いお茶、いきあたりばったりだが、それも土瓶でくるか、薬罐でくるか、魔法瓶と欠けコップでくるか、先様まかせだが、〝チャー〟のひとことがどう千変万化するかを眺めるのもたのしみのひとつではないか。

一九六八年に私がしばらく暮していたのはメコン河の支流の一つに浮かぶバナナ島で、戦争については選りぬきの最前線であったが、生活についてはようやく石器時代から鉄器時代に入ったという段階であった。鍋や釜や包丁があるところを見れば鉄器時代に相違ないが、小屋は竹を何本か土に刺しこんで周囲をヤシの葉の編んだのでかこっただけであり、敷居もなければ床板もない。小屋の床はむきだしの土で、ただ人の踵で踏みならされただけのものである。夜になるとその黒光りする土の一点がふいにむくむくして一匹のヒキガエルがランプに集るカやガを食べようと体をあらわしてきたりするのだが、それもたちまちヒトの指にさらわれ、翌朝のオカユに入れられたりする。

朝になって雲古をしようと思うが、だいたい紙というものが徹底して見つからないから、バナナ畑に入っていって、いたすこととなる。投下のあとはバナナの葉で御挨拶申上げるしかないのだが、バナナの葉というものは新鮮なのは肉が厚くて、広くて、ひんやりと気持よいが、ツルリとすべるのできっと何がしかの不安感がのこる。といって土に落ちて枯れきったのは繊維がむきだしでゴワゴワし、よく食いこんでくれるのはいいけれど少し痛いというらみがある。だから、理想に近いのは、緑すぎず枯れすぎてもいないのを注意深く選ぶことであると、二日ほどしてからわかった。ラブレェはガルガンチュアに木、石、縄、思いつくかぎりの素材でお尻を拭かせて何がいちばんいいかと思案させているが、適切な状態にあるバナナの葉は紙の何番目かに好まし

いものだと私は推薦したいと思う。

観察していると、この島でも湯ざましを飲むか、熱いお茶を飲むかしていた。生水を飲んではならぬという知識は永いあいだに身にしみたものとなっているのである。モンスーン地帯の亜熱帯では空気がむっちりとうるみ、強烈な陽が射し、小屋や木かげでじっとしているだけでも汗がじめじめタラタラと流れてくるのだが、そのなかで煮えたぎったお茶をすすっていると、それに慣れてしまうと、かえって汗を忘れることができるようなのである。汗を忘れるには徹底的に汗を流すのが一つの方法である。農民は手首まで袖のある黒のパジャマの上下を着ているが、熱帯だから白を着たらいいだろうにといいたくなるけれど、あまりに陽が強烈なので反射するより吸収してしまったほうがいいのであるし、手首までかくしてしまったほうが膚に痛くないのだと教えられる。

夜ふけに回想にふけっているとき、ずいぶんいろいろな国の水を飲んだものだと指を折ってかぞえたくなることがある。ふくよかなのもあったし、やせこけたのもあった。磨きぬかれたのもあったし、ガサガサのもあった。ひきしまったのもあれば、のびきったのもある。峻烈そのものといいたいのもあったし、まるで消毒薬を飲まされるようだったのもある。水は水素二箇と酸素一箇で構成されているかもしれないが、ほかにも微妙な味をたくさん含んでいて、その襞のこまやかさや深さをさりげなく背後にかくしてしまって何食わぬ顔で澄みきっているようなのが逸品と思われる。アメリカ人がはたらいているところにはきっと冷却蒸留水を飲ませる装置があり、紙コップをだしてボタンを押すとガラスのなかでポカリ、ポコッと大きな渦が起る。あの水はおそらく徹底的に清潔で衛生的なのだろうと思うが、まことに親切に冷やしきってあるにもかかわらず、何の味もしない。ふくみ味もないし、かくし味もない。輝きもなく、ふくらみもない。うんざりする。ただの、まさに《H２O》である。それ自体は純粋の極なのかもしれないが、純粋がこれくらい味のない例も珍しい。

昭和四十五年の六月、七月、八月、私は仕事をしようと思って新潟県の山奥の銀山湖畔で暮した。こ

こは水道も、ガスも、電気もなく、一年の半ば近くが雪に埋もれるので、年賀状が五月に配達されるというような聖域である。その湖畔の林業事務所の小屋の二階にこもり、バターをさかなに焼酎を飲み、夜は石油ランプをともして本を読んだ。食料品はいっさいがっさい宿の主人が車を走らせて電発トンネルを十八もくぐって小出の町へ買出しにいくのだが、それにカドミウムだの、水銀だのが入っていたら（――おそらく入っているのだろう）どうしようもないが、湖畔にはスモッグもなければ農薬もなく、水は水の味がし、木は木であり、雨は雨であった。

黄昏になるとよく雨が降るのだが、そうなると雲とも霧ともつかないものがもうもうとわきたって流れ、小屋も、峰も、灌木林も消えてしまい、数知れぬ雨の格子がぎっしりたちこめ、ただ遠くで川の鳴る音がするばかりである。それを聞きながら小屋の二階で焼酎をすすり、じわじわと酔いがひろがってくるのを待っていると、部屋のすみに酸鼻といいたいようなものがうずくまり、おれはこのまま頭から朽ちてしまうのではあるまいかと、恐怖をおぼえることがあった。

ここでは私は超一流品と呼べるような水を飲んだ。山の沢の水や、岩清水である。イワナを釣りに山道を歩いていると、よく岩壁があって、はるかな頂上の暗い林から一直線に水が落下してはしゃいでいるのを見る。あの水である。この年は寒冷がいつまでも去ろうとせず、六月になって深山の襞ひだに雪がのこっていたが、その雪洞を覗くと、暗いなかに霧がわき、氷の天井からポトポト水がしたたり落ちている。この水は水晶をとかしたようである。純潔無比の倨傲な大岩壁をしぼって液化したかのようである。これを水筒にうけて頭や額にふりかけ、頭と手を洗い、さてゆるゆると飲みにかかる。いまのいまでフキの葉のあいだに小さな、淡い虹をかけていた水なのである。

ピリピリひきしまり、鋭く輝き、磨きに磨かれ、一滴の暗い芯に澄明さがたたえられている。のどから腹へ急転直下、はらわたのすみずみまでしみこむ。脂肪のよどみや、蛋白の濁りが一瞬に全身から霧消し、一滴の光に化したような気がしてくる。その体をこまめにうごかして、腰から鉈をぬき、崖を木の根にすがって上ったり下ったりしながらそこかしこ

に顔をだしているヤマウドの芽を集めるのである。宿に持って帰って山の手作りの辛い味噌をつけて食べると、その峻烈なホロにがさが舌を洗ってくれて、どうにも酒が飲めてしかたない。

七月になって雪が消えてしまうと、イワナ釣りにはべつのたのしみが生じた。山道の岩壁のあちらこちらではしゃいでいる岩清水をよくおぼえておいて、どれがいちばんうまいか、どれをひいきにしようかと、考えるのである。いちばん澄んでいそうで、いつも水勢たくましく、量がたっぷりあり、もっとも高いところから長い距離を走ってきたの、そしてできることなら岩肌に淡い虹をかけてくれているの、そういうのを厳選して、なじみの店にした。そうなるといきつけの酒場の椅子のようにかわいくなってしまって、ほかの岩清水が飲めなくなってくる。釣りにいきがけに一杯飲み、今日は釣れそうだと、うれしい予感をもらい、帰りがけに一杯飲んで、頭や顔を洗う。そして、やっぱり釣れたよ、とか、てんでダメだったぞ、とか、いま一息ってところだった、などと胸のうちでつぶやくのである。こう親密になってはほかの岩清水がいくらはしゃいでいてもちょっと浮気ができなくなってくる。

七月、八月と夏が進むにつれて岩清水の顔や味や肌ざわりも変っていった。暑くなるにつれて水量がとぼしくなってやせてしまい、霧がわいたり虹がかかったりすることはなくなり、走りかたが弱くなる。そして、気のせいか、これまでになかった木や、枯葉や、苔の匂いが、すっかりゆるくなってしまった舌ざわりのなかにとけこんでいるように思えたりした。いわば水は、重くなったのである。無味の味であるべき澄明さのそこかしこの襞に、いままでなかったいくつかの味がひそむようになり、何からきたものであるか、その像が浮かんでくるようになったのである。

村杉小屋主人の佐藤進は、ひとこと

「衰えたぜや」

といった。

私が顔を洗いながら

「秋になるとまたよくなるんじゃないの」

とたずねた。

佐藤進はしばらく考えてから

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com